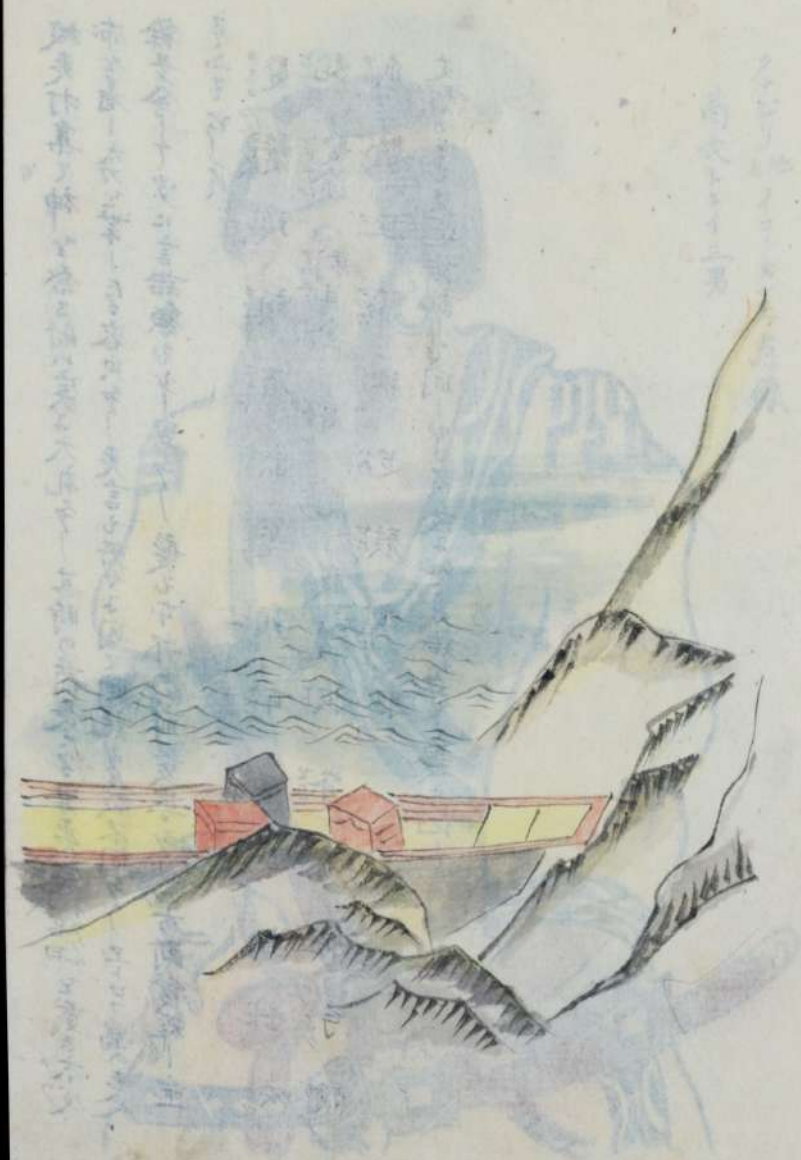




蝦夷奇観



松前 夷名マツマエ 福山 夷名マツマエ 東蝦夷地百里許 ハツとて 河 ハツとて 河 ハツとて 此山奥にヤイルと
 なる年老の酋長 僕廻行 ハツとて 此道の傍に出進 ハツとて 此陣 ハツとて 案内 ハツとて 此処の二司馬
 と ハツとて 者曰 ハツとて 此アイヌヤイル ハツとて 夷人の通称 ハツとて アイヌと云 ハツとて 萬葉集 ハツとて 持 ハツとて 古の事 ハツとて 能 ハツとて 知 ハツとて ま ハツとて う ハツとて 也
 少 ハツとて け ハツとて 酒 ハツとて 進 ハツとて 多 ハツとて て ハツとて 同 ハツとて 名 ハツとて 酋長 ハツとて と ハツとて 呼 ハツとて び ハツとて 昔 ハツとて 物 ハツとて 話 ハツとて を ハツとて 知 ハツとて れ ハツとて り ハツとて と ハツとて 少 ハツとて 此 ハツとて 東 ハツとて 方 ハツとて 國 ハツとて は ハツとて 何 ハツとて の ハツとて 比 ハツとて 夷
 人 ハツとて 住 ハツとて 居 ハツとて せ ハツとて る ハツとて 事 ハツとて を ハツとて ヤイル ハツとて 曰 ハツとて 古 ハツとて 南 ハツとて 方 ハツとて の ハツとて 神 ハツとて の ハツとて 國 ハツとて 女 ハツとて 神 ハツとて を ハツとて 人 ハツとて 虚 ハツとて 船 ハツとて は ハツとて 第 ハツとて 一 ハツとて 此 ハツとて 途 ハツとて シツナイ ハツとて に ハツとて 漂
 着 ハツとて 玉 ハツとて 以 ハツとて り ハツとて 珍 ハツとて 宝 ハツとて 種 ハツとて を ハツとて 持 ハツとて て ハツとて 来 ハツとて せ ハツとて る ハツとて 黄 ハツとて 金 ハツとて 白 ハツとて 銀 ハツとて 水 ハツとて 晶 ハツとて 玉 ハツとて 行 ハツとて 器 ハツとて 耳 ハツとて 盥 ハツとて 乱 ハツとて 宮 ハツとて 鉈 ハツとて 子 ハツとて 玉 ハツとて 盃 ハツとて 金 ハツとて 箸 ハツとて 杯
 盤 ハツとて 外 ハツとて の ハツとて 宝 ハツとて 物 ハツとて 数 ハツとて 多 ハツとて と ハツとて 少 ハツとて 此 ハツとて 治 ハツとて は ハツとて 漂 ハツとて 着 ハツとて の ハツとて 初 ハツとて 汎 ハツとて 而 ハツとて を ハツとて 防 ハツとて 止 ハツとて せ ハツとて る ハツとて 食 ハツとて 物 ハツとて を ハツとて 求 ハツとて る ハツとて に ハツとて 由 ハツとて り ハツとて て
 饑 ハツとて た ハツとて り ハツとて る ハツとて い ハツとて ぼ ハツとて く ハツとて る ハツとて 二 ハツとて 疋 ハツとて の ハツとて 雄 ハツとて 大 ハツとて 来 ハツとて て ハツとて 神 ハツとて 后 ハツとて 近 ハツとて 付 ハツとて 馴 ハツとて る ハツとて 心 ハツとて り ハツとて け ハツとて 尾 ハツとて を ハツとて 少 ハツとて 傳 ハツとて つ ハツとて き
 先 ハツとて 立 ハツとて 行 ハツとて を ハツとて 嫌 ハツとて く ハツとて 伴 ハツとて 行 ハツとて は ハツとて 大 ハツとて 多 ハツとて の ハツとて 巖 ハツとて 窟 ハツとて を ハツとて 行 ハツとて け ハツとて る ハツとて 茲 ハツとて 来 ハツとて て ハツとて 月 ハツとて 日 ハツとて を ハツとて 過 ハツとて せ ハツとて る ハツとて 少 ハツとて 彼 ハツとて 大 ハツとて 海 ハツとて 邊 ハツとて 走 ハツとて て ハツとて 魚 ハツとて 物 ハツとて 海
 藻 ハツとて を ハツとて 求 ハツとて る ハツとて 或 ハツとて 山 ハツとて に ハツとて 入 ハツとて 野 ハツとて 行 ハツとて て ハツとて 木 ハツとて 葉 ハツとて 草 ハツとて 実 ハツとて を ハツとて 運 ハツとて て ハツとて 飢 ハツとて を ハツとて 助 ハツとて け ハツとて 露 ハツとて 命 ハツとて を ハツとて 救 ハツとて い ハツとて 月 ハツとて 日 ハツとて を ハツとて 送 ハツとて る ハツとて 少 ハツとて 怪 ハツとて く
 し ハツとて 遂 ハツとて 大 ハツとて の ハツとて 子 ハツとて を ハツとて 孕 ハツとて る ハツとて 夫 ハツとて より ハツとて 子 ハツとて 孫 ハツとて や ハツとて 榮 ハツとて に ハツとて 榮 ハツとて て ハツとて 今 ハツとて 来 ハツとて る ハツとて 秋 ハツとて 人 ハツとて の ハツとて 起 ハツとて 原 ハツとて と ハツとて 多 ハツとて る ハツとて け ハツとて 夫 ハツとて 故 ハツとて 女
 夷 ハツとて の ハツとて 神 ハツとて 后 ハツとて の ハツとて 血 ハツとて 脉 ハツとて に ハツとて 少 ハツとて 男 ハツとて 夷 ハツとて は ハツとて 大 ハツとて 蛇 ハツとて の ハツとて 後 ハツとて 胤 ハツとて 少 ハツとて 少 ハツとて 傳 ハツとて 少 ハツとて り ハツとて と ハツとて 語 ハツとて ま ハツとて ず



蝦夷打集て神を祭る時、其時、酋長なる男、夷冠（イロウ）を戴き、木皮
 布を着、太刀を帯、たる容、良き、夷言も所々、因て轉訛（テウキ）も、故不同、エト、ロウ、嶋の夷人
 餘多、令て、少に言、語、難、も、少、男、多、髪、も、本、邦、の、前、髪、姿、多、四、方、斷、髪、短、一、重
 子、お、ま、り、り、り、

髮カミ 鬢カミ 頭カミ 額カミ 眉カミ 眼カミ 鼻カミ 頰カミ 耳カミ 口カミ 唇カミ 齒カミ 喉カミ
 鬚カミ 鬚カミ 刺カミ 耳カミ 金カミ 骨カミ 乳カミ 腹カミ 腰カミ 股カミ 脊カミ 背カミ 腕カミ 手カミ 指カミ
 爪カミ 腋カミ 肘カミ 膝カミ 臍カミ 足カミ 脛カミ 踵カミ 腰カミ 膝カミ 手カミ 指カミ

文體の異名、遠近、語訛、も、同、り、り、故、も、此、の、語、を、文、て、綴、り、た、り

クナヅリ地名 イコクカヤニ男像
 酋長トキイ三男



此の人物は、クナヅリ地方の酋長トキイ三男の肖像である。彼は黄色い着物を着て、大きな黒い髭と髪を持ち、黄色い頭巾をかぶっている。腰には刀と弓を佩いている。背景には淡い雲が描かれている。

女更玉器を雅に咽子玉輪を掛表を着し上は木皮布を打つけ鐵器を持たる図なり女子の
 通称メノ又メノコレ娘をマチチホウ婦人なマチと唱ふ日本紀金婦をマチと訓たり髪を半
 剃て図の如く衆の時以後をさうは三年に至る忌帽子を冠て厚く勤る事其謹本邦の卑
 賤の婦人の及所なりけり

吟文 喉玉輪 服 衆 襟 懷 袖 袂 上前裾

高文より二頁
 吟文より三頁





女夷文手の品

夷人云傳ふい古四ツチヤカモイと
 不神ありて休四尺斗手の長き
 神より如くお住玉ふ此神漢獵の
 色より通カセりて以^イ土舎に住のありき
 夷等に奥政象因おせ又忘より
 其のありて此故に其漢獵の術を
 學んと近しれと教果さるるを
 夷人等々婦焉と此地を去るを
 其其神專はるるを美色あり
 一り手おをこの文裡りて史故より



彼神の徳を慕ひて其形を写し侍りて女夷と
 今よりあらずや身を文とて古老の傳説あり其住るを曲趾と云ふなり又土中なり
 陶器の碎りたる又玉の類種々の宝を掘出する事なりとノツカツブ^{地名}長にヨシフ

語りき

日本記神武天皇己未年二月脩下曰高尾張邑有玉蜘蛛其人為也身短手長手侏儒相類下思

往昔の者

何き又竹ゆの舊き ちつー近年魯西五人来り島とてお中へ掘入て家
を他より彼國へ近き故に古に倭住しをり為傳るる所今たれ五名の彩イロドリなる夷人ありて
況や又昔文とありていふも約ヨク夫より又コナチヤ神の旧跡を掘りて通明なる玉の破たる又を石智雷谷
思て写し置いたるありて亦コナチヤ神の旧跡を掘りて通明なる玉の破たる又を石智雷谷
等の類後世に傳へりて石智雷谷と出る事なりシヤモコリ名酋長ノチクサニ神の此刀
子ありこれ此里にアレを以て切と云り



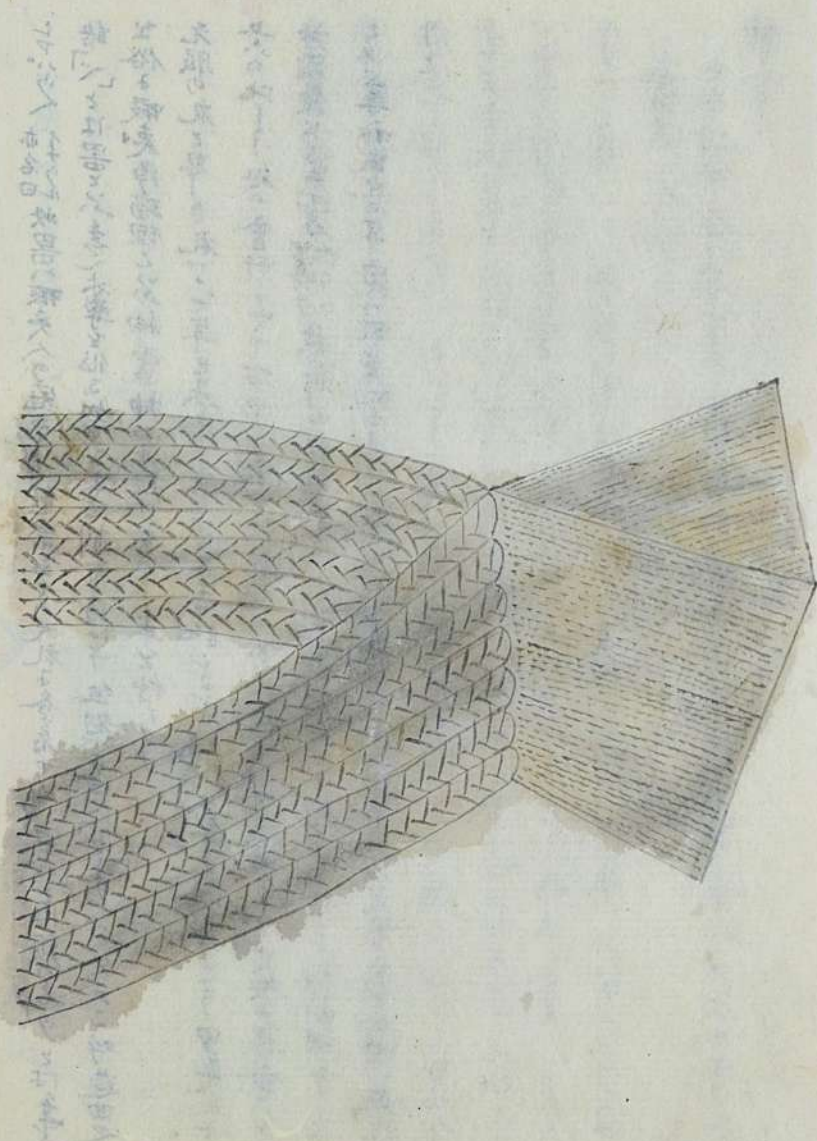
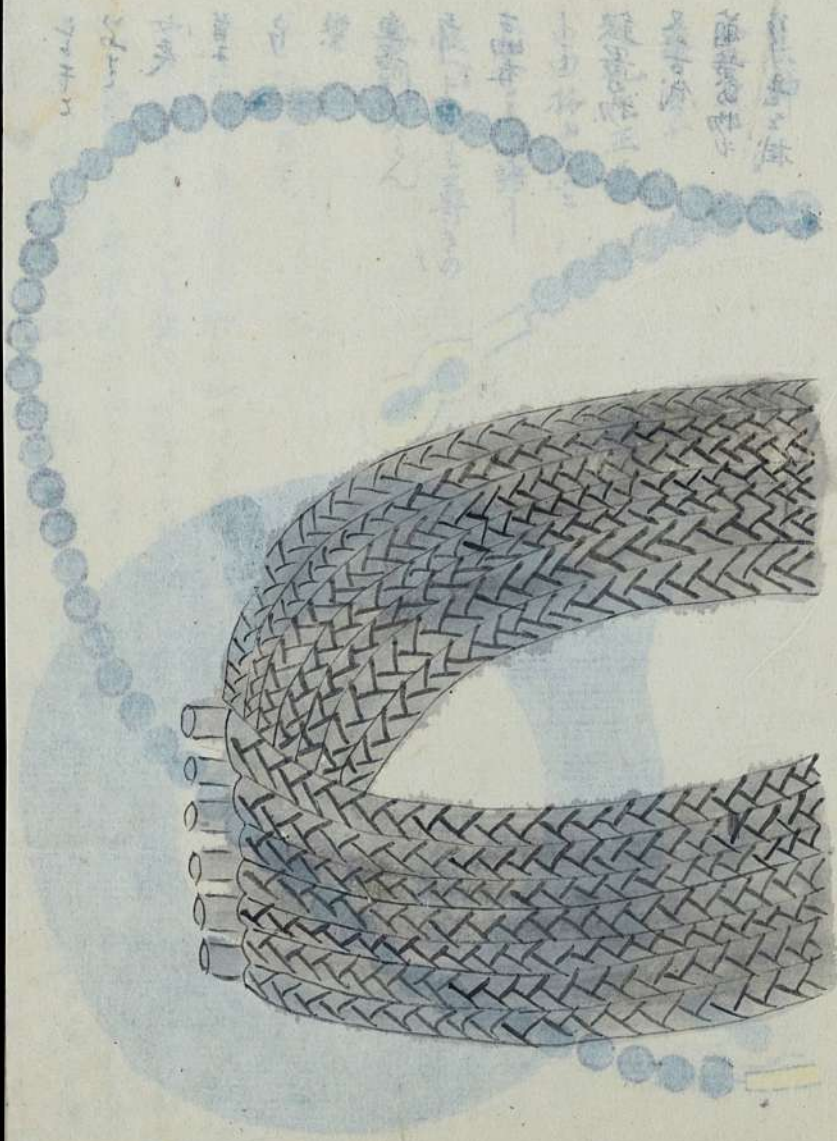
レバ赤名曰此思ハ暇夷人の冠あり能奈ある大礼を各着たりレバとは頭の名と云ふ
語レとは思ふふまに本辭を他より如く本を削りてけは組製するといひすべしと云ふ呼造曲之
を俗に暇夷淨瑠璃といふ神靈神靈授けりて事を傳たり

元服の礼と思ひき礼ハ七年に未成なりと云ふ子モ名地レヨシノ酋長と云夷物着たり男夷九十
六の比り此の會所は布帛を求の積鼻輝とありて結了て後時として又然集會して

神酒飲ちて名里長ラ彼辭を召出とレバレをわびせりかり誓古を行くむ古例なりき
と云享和改元の年西武の暇夷地なり或酋長は望みし高北濱にやりの邊は又形状少く残れ

りと





代
物
の
物
を
掛
る

下はまゝ本もろろ滑らぬやうに
 受て下へ下はまゝの裏返しに貼る
 利て糊もけら金糸をきりぬき下へ
 下へ下へ金糸をきりぬき下へ



イナホと云ふ幣帛の心より神に奉る夷地は布帛命をき故に木を削りつけ
 けて幣を代る本邦太古にのりせりとて正月十五日削りつけをうけるも其遺製
 ありしイナホと云ふ夷名を按るるは稻穂の語なりし初穂と云ふ同義に
 イナホといふ木ありて作る如しなり又祈り用由を製し根より葬祭の時逆木
 として作るあり

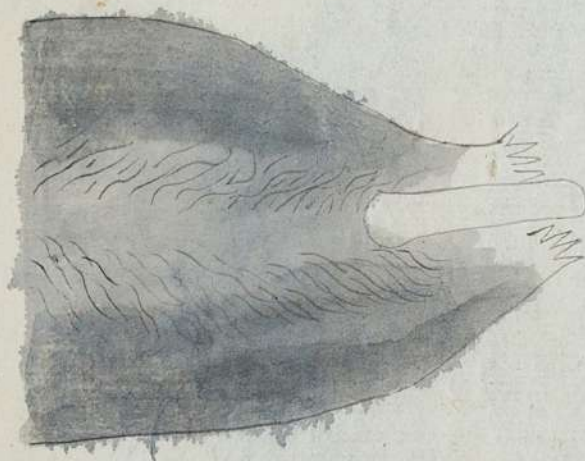


イナホ



イナホと云ふ幣帛の心より神に奉る夷地は布帛命をき故に木を削りつけ
 けて幣を代る本邦太古にのりせりとて正月十五日削りつけをうけるも其遺製
 ありしイナホと云ふ夷名を按るるは稻穂の語なりし初穂と云ふ同義に
 イナホといふ木ありて作る如しなり又祈り用由を製し根より葬祭の時逆木
 として作るあり

ウルツフ鳥一名曰^{ハシ}鳥^{ハシ}者^{ハシ}より東北亦里にちり最上常矩より^{ハシ}きて^{ハシ}海^{ハシ}り地回を創る^{ハシ}ん
 上^{ハシ}に^{ハシ}フ^{ハシ}者^{ハシ}ナ^{ハシ}レリ。キツツフ鳥の夷初夏より此客に候て^{ハシ}獺^{ハシ}尾^{ハシ}清人文字を製^{ハシ}てし
 しを獲る大^{ハシ}六^{ハシ}七^{ハシ}尺毛厚く^{ハシ}後^{ハシ}核^{ハシ}上^{ハシ}下の^{ハシ}領^{ハシ}を^{ハシ}包^{ハシ}紫^{ハシ}黒^{ハシ}席^{ハシ}草^{ハシ}の^{ハシ}品^{ハシ}と^{ハシ}す
 獺^{ハシ}尾^{ハシ}海^{ハシ}上^{ハシ}に^{ハシ}浮^{ハシ}む^{ハシ}時^{ハシ}ハ^{ハシ}腋^{ハシ}を^{ハシ}上^{ハシ}に^{ハシ}浮^{ハシ}游^{ハシ}せり又^{ハシ}岑^{ハシ}山^{ハシ}より^{ハシ}上^{ハシ}れ^{ハシ}至^{ハシ}



イナ



一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、



合列坐して先其貴人^ノ邊^ニ向^テ合掌し其^ノ終^ニ掌^ヲを屢^ニ摺^ル合^ニは次^ニ手^ヲを披^キ左右^ニを揃^テ
 我^ノ額^ノの辺^ニを捧^ゲ其^ノ貴^ノ客^ノを戴^キ上^ル様^ニなり一^ノ偲^手を返^シ一^ノ甲^ヲを向^テる^ノなり額^ノ髪^ノ
 廻^リそ^ノろ^ノ撫^ル却^ル中^ニ如^クして髭^ノの末^ニに^テある^ノ白^ノ髻^ノ蹕^ノの^ノ声^ヲを^テ発^ス如^ク此^ノ三^ノ度^ノ而^テ止^ム所^ノ敷^ル
 其^ノ礼^ハ快^ク 寛^クなり



ウリと云ふ親子兄弟友を罷て久く対面の地有り者に合はる折なり前のかく礼をまじ
 次は老たるより若き者の頭面耳の上を両手をもく押む松子形にまよりと云ふと撫御有り
 より手先より目の如く念揃く漸く顔を合はる次は双方膝を互を寄肩の上より白と
 入合せぬさくくと涙を流し暫時の程言語を交はる之猶有て立退互の安否何れと
 言ふとやもせざるなり



夕更の礼い殊き爲一対する人を両手
 しく握り即一欠き方の食指を以て
 我鳥の下を撫ぐ所と三度又
 袖をなほさるなり



膾炙の部

蝦夷の部
 蝦夷の部は蒼海に膾炙の部と出たり冬十月より春三月比を余りて取
 るは漁事を好む者なり蝦夷といふは其比は多き物忌程とありて舟を清め
 木幣神酒を製して海神船神を祭る膾炙の部方名ウチラと称す雌をウチラと云
 リ大ウチラ余亦一種ウチラと云物なり大ウチラ許より六七尺二種は牙ありて上
 の文並は下は持齒あり波に浮たる取左の図の如し西地ヲコレリと出る品尾鱈
 少く黒るなり空移り浪静なる日を窺て漁事を出り其跡を以物音を禁一家
 の婦女等食事を潜り居られ候なり物驚して眼を覺えとを捕獲て戻れと
 正窓に入りて其か漁具の出し入れなり忘りて居るを獲りてと云





獲て未會一所に出ても衣服煙草

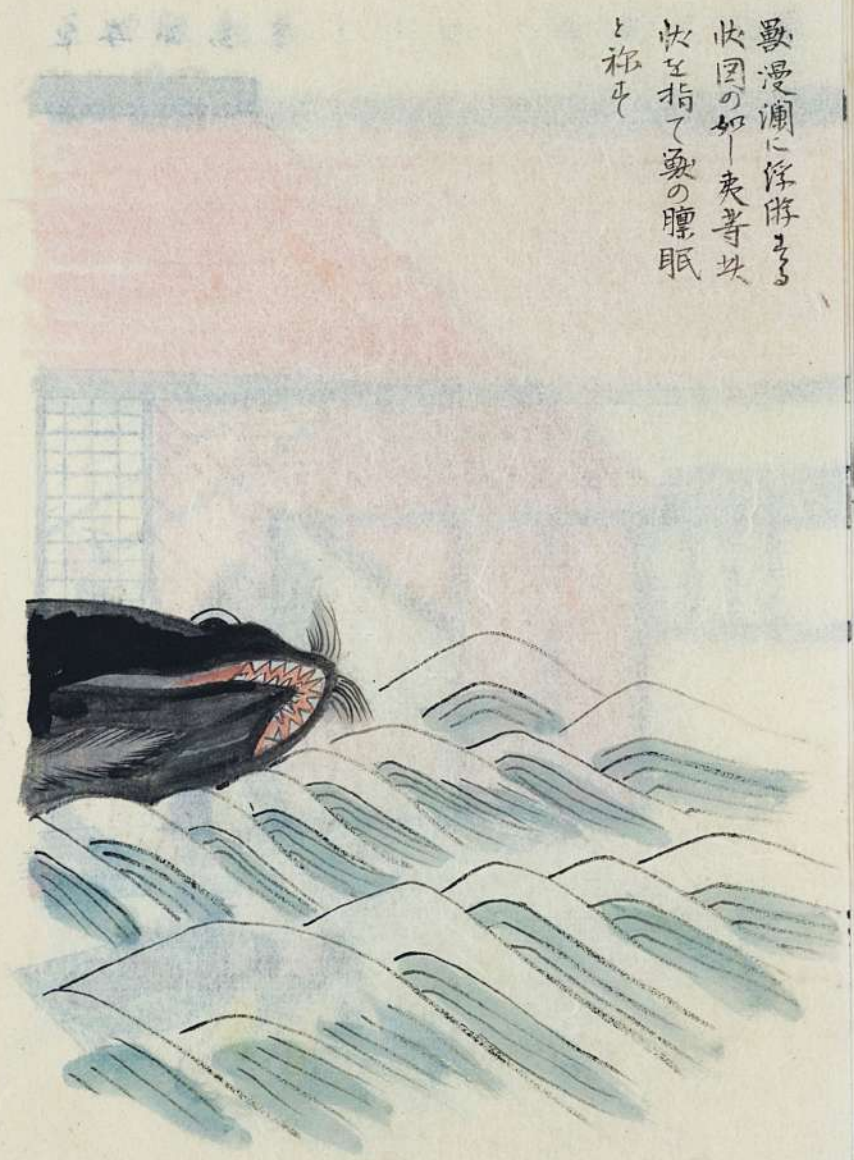


包と手ふふ王



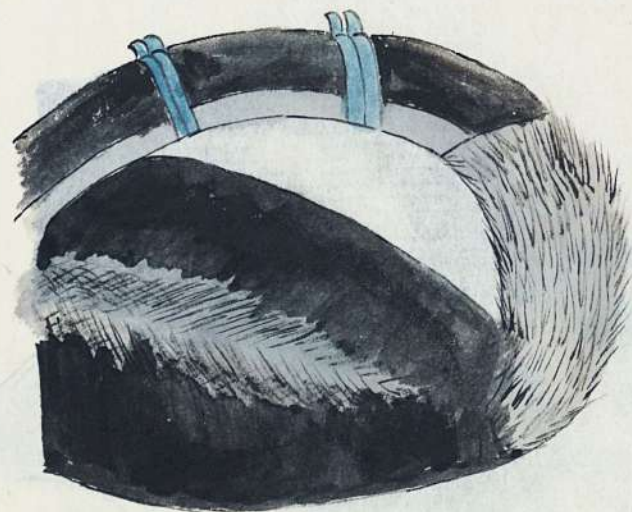
外に於て一夫一婦
とて夫婦の形を
とて夫婦の形を

要漫瀾に浮遊する
 此國の如く夷等其
 故を指て要の腫眼
 と稱す



龍の如く

塩製さくし多々圖



海狗腎 鹹大池魚毒
 教曰用酒浸一日紙裏名各對搗取銀器中以
 酒熟煎合茶



ヲ、子ヲア因
 西地ヲコレリに尋く此品を
 産す





イヨマニテ一日イヨウ 是夷地の大祭事ヲ以て龍を敬し神を祀る初春ノ深山の積雪
 を分て飼馴たる大熊の糞ヲたるとを採りて獲る其子を取て家婦ニ与へ乳けを与て育
 る生所より荒き龍に入るとり食ひ魚因を飼ふ冬十月此に至きて長くて大熊と
 する日として酒会を製し親族信友を集む之を賓人造とて其日の朝に熊は極く冷せ
 神は今日ヲマニテヤリ 餌喰ひのいと税言して集夷龍を周り躍るを削りけ
 の幣木を製し如垣を並べ前文座を布備熊を籠りてす事い家婦のふた古例
 あり





其時群衆の中より一人両耳を取て背に打乗五三人立寄首に綱三筋結付りあふあふ
 たとの傍に狂遊を首長側に在てより方に向ひ矢を放ちカモイノラセニテノウと唱ふ夫
 ゝ男衆は嬰兒に至りて候まら矢を製し持て先其処の首長の二男り又ハ熊と飼
 主宗の子の村初より只矢の中るのゝ疵ハ付ぞ

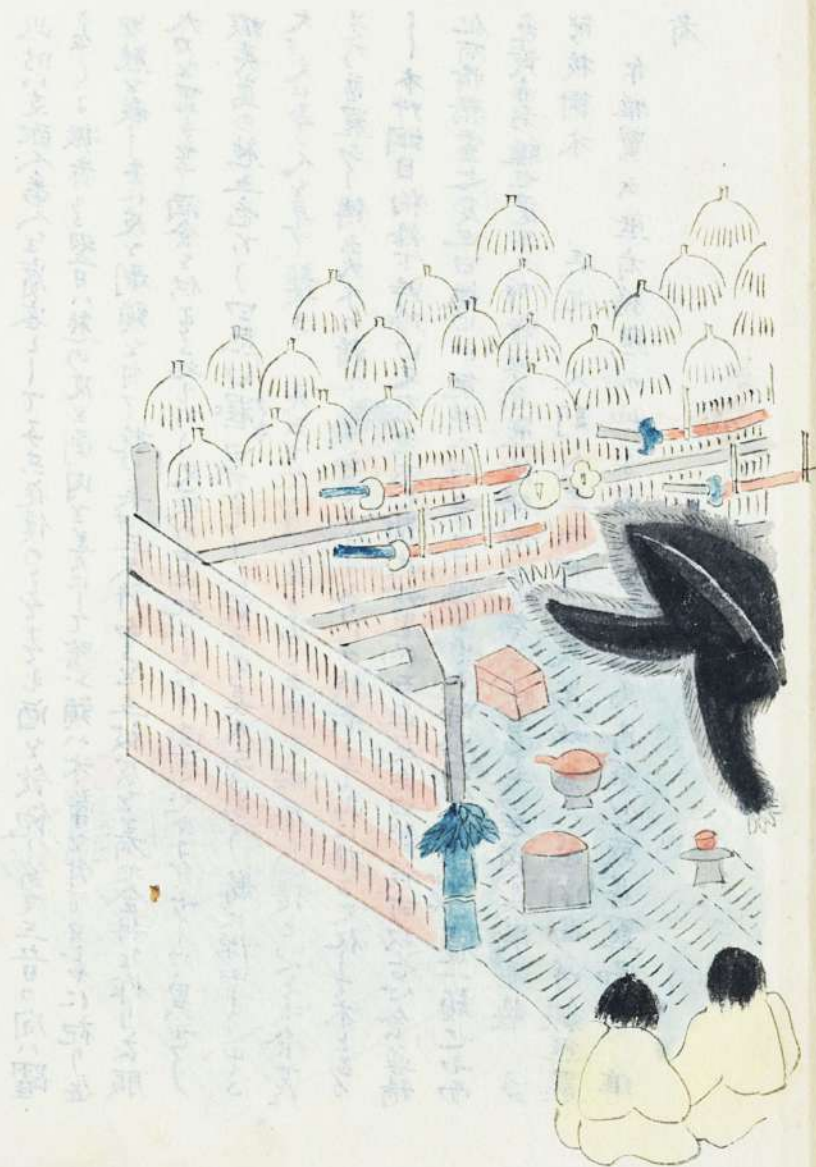


長八尺許多
 木と三本
 差て作て
 を射る
 事終れ
 首と木の上に引ま
 上りし木を押し
 胴も横に木を剋押
 殺す時に白銀作りの
 太刀を首に当るの少
 も刃物を用いず此時
 処にして群る夷に粟
 の更次に米を蒔けり
 う育ちたる夫婦ハありき



堪ん伏さるる許り



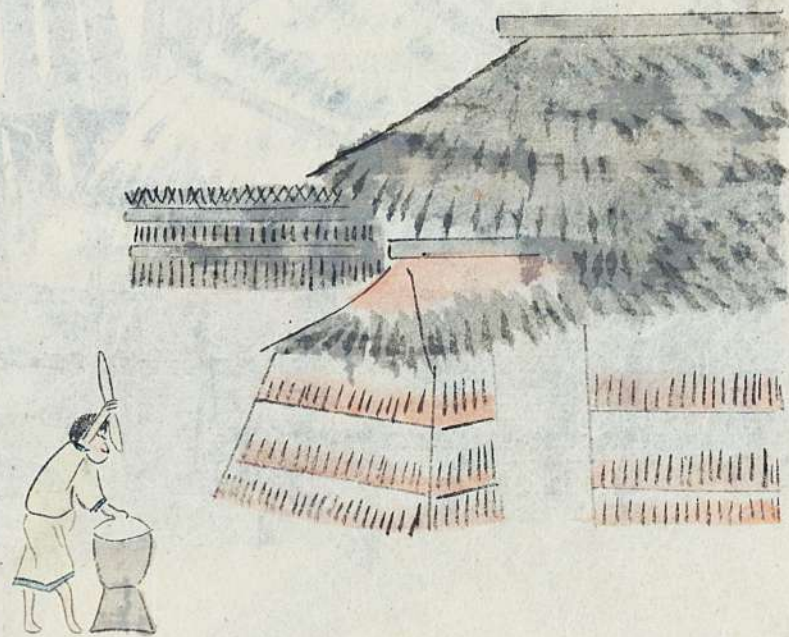


此以支配人番人を賓客として子孫後僕のともを酒と飲飽めて三日間躍
 する振舞ひ翌日熊の皮を剥肉を煮て酒を奉りて又翌日に祀り
 ぬ熊を殺し皮を剥頭を付て杭の長さ三尺許るを立彼皮を着て全体を作り衣服
 太刀を帶ぎて酒會を供ふ如し又家の中に祀るなり遠近如き少く異なり
 蝦夷島の熊五色なり曰熊曰羅曰アルキフハ羅の又長大なり稀に深山より出
 大ク大なる人を見て襲き夷云アルキフハ来る番と云事蝦夷人獲るとも食を
 是乃爾羅多傳云大木の精化してさきとて斧にて伐断し山に捨る又化て木となり
 本州綱目狗條下時珍曰又有老木之精化如里伯而魚尾名曰彭候可以舌心食而精
 化有情精靈之變也曰熊曰白熊其二種エトロフ嶋に於て時珍曰熊羅熊三種一類也小而
 色黃赤者熊也建平人呼熊為赤熊陸機謂羅為黃熊是矣羅頭長脚高猛多
 能拔樹木長之人則人立而攫之故俗呼為人熊閩西呼貍熊羅
 尔雅翼云熊有猶熊形如豕有馬熊形如馬即羅也或脊羅即熊
 者

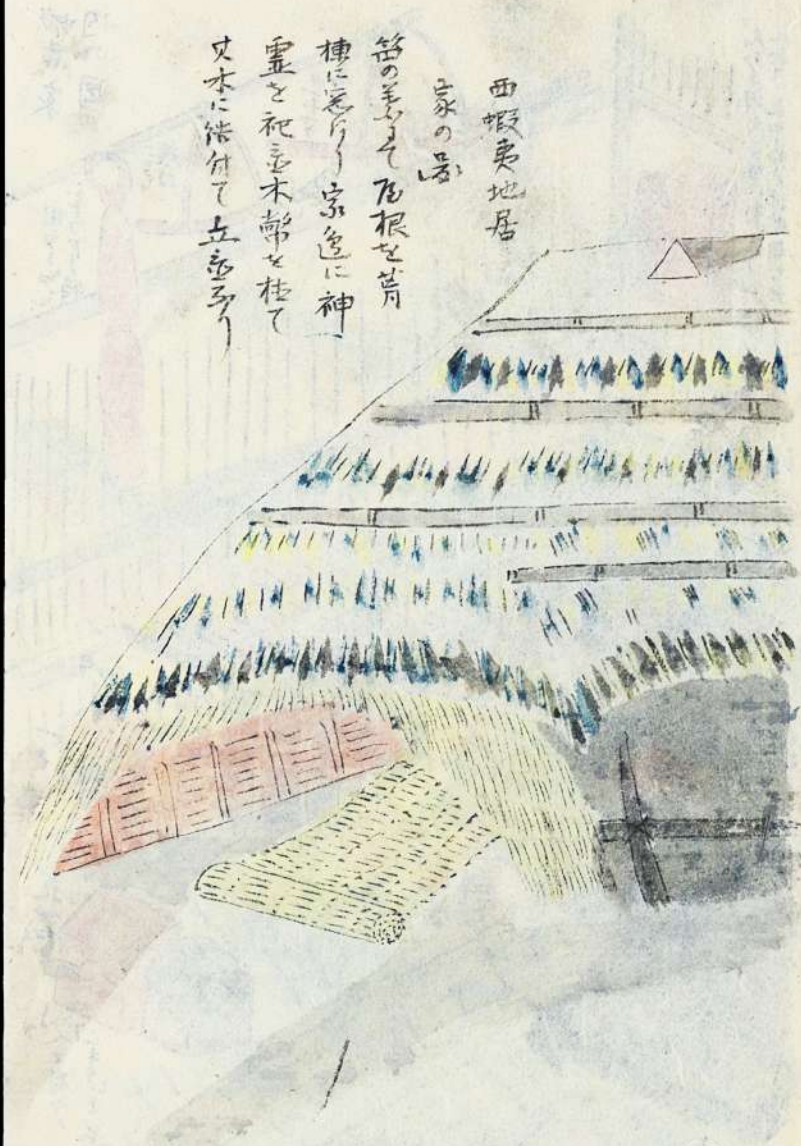




蝦夷近地居家の圖
 4セ舎屋の名あり形を方
 に造営す間尺の量なく尋
 教を用ひ古に神八尋の殿を
 作るふ古意思なり申入の戸
 は一処破戸なり明と取れ
 て近き夷地いふもなり又八口
 園の如し
 家の造り垣の如く木幣と立たる
 処に方名スヤと云ふ年ころ神座
 として祀る時獲たる魚獸の頭
 を奉れり



西蝦夷地居
 家の形
 笛の音より 瓦根を背
 棟に走り 宗途に神
 霊を祀る 木幣を柱に
 丈木に結付て 立ち多し



ト、と、と、海獣の
脂、油、を、入、拭、を

鍋

カシ

鍋

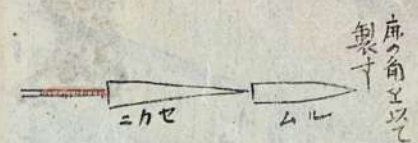
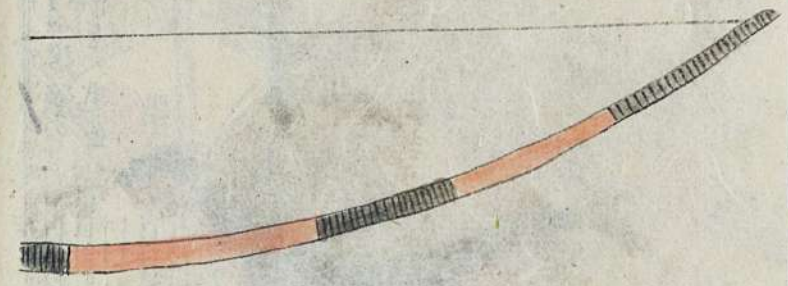
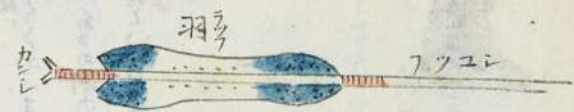
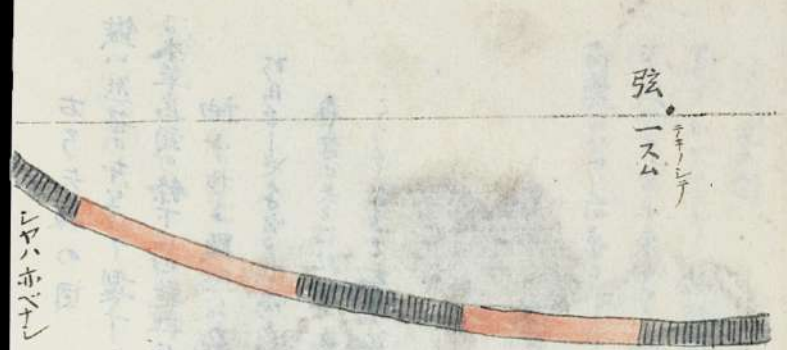
イヌレ

圍爐裏

大分県

大神祭

大分県



コ、ルキ

ロヨレテ

右弓矢報の図

鏃に熊笹のやを以て製す鳥頭と搗燐一如圖の奥敷の肉中へ射込ハ忽然とて斃
る本草鳥頭の條下に曰斃韃にて毒矢を用ゐる一梅多にカラフト島一製一竹多
袖中抄子顯照公の歌に

ちりちり也子客れ旅夷のほくらるまあ季の矢子そむまはあつるき

毒矢の矢とはれくろあつるまの羽のくろふ附子といふ毒をぬきて甲のちるぬをせ
くしてあつと云り附子矢といふはさきなり

左の図

アツブホアツクウ 山林曠野の中品品の如くあつる弓と忽該敷を獲る又敷大いよ
弓矢のさきを今来とくし掛を多し矢の矢の糸にさされ毒矢花出て諸敷よりれい
即斃るアツとはあつるくろくろとは弓の名なり



マキコルの図

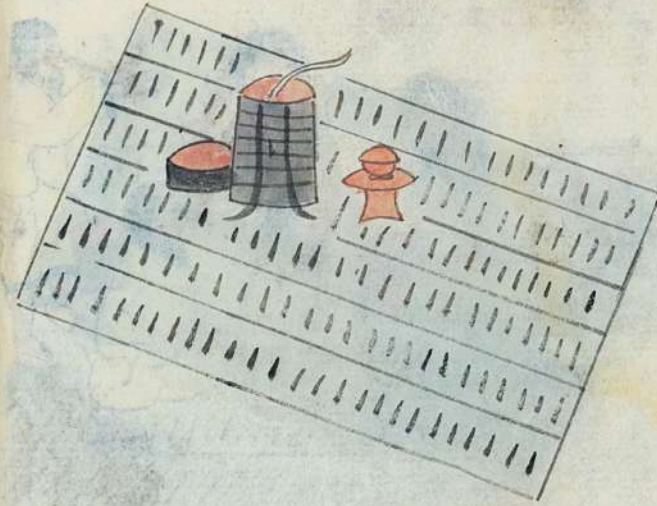
て我々の婚礼の事なり。又親との意にすせ。嬰兒の比より。云号。安んじ。又壯年の比に及
て娘を迎ひ。算を市なり。是より。行との室に。女の家に。嫁り。凡夷。今。を賤。おし。て。結納。おこ
す。共。大抵。太刀振。を。貯。き。い。喜。ひ。持。た。れ。と。ふ。風。俗。なり。彼。より。い。ろ。け。を。ま。の。女。兒。成。長。ま。れ。と
す。女。の。家。に。多。く。い。能。と。多。く。妻。合。し。て。海。東。山。嶺。の。事。を。い。ひ。ひ。只。利。を。男。の。家。に。い。り。く。る。も。非
じ。我。父。母。の。扶。り。も。せ。て。皆。語。り。か。き。ま。し。て。母。を。は。り。ぬ。偕。壯。年。の。及。て。婦。人。を。迎。え。い。ち。邦
に。同。く。媒。人。有。て。又。婦。を。つ。れ。て。夜。分。に。彼。家。に。忍。ま。せ。入。る。尤。女。を。媒。人。の。後。ま。わ。り。て。行。止
ふ。舅。姑。も。ち。づ。暫。休。を。し。て。又。も。見。ぬ。なり。な。し。て。時。音。の。物。語。を。し。て。居。る。中。に。知。年。の。傍。か
き。て。向。て。又。故。に。娘。入。知。年。の。旅。の。燈。火。も。つ。き。う。お。爐。の。火。も。燃。え。上。り。し。て。能。く。内。中。に
十。被。脱。不。同。と。て。火。を。焚。き。と。て。何。所。に。来。り。し。や。お。門。の。考。も。あ。ら。う。と。上。を。尾。と。す。り
し。て。い。ろ。う。又。後。女。夫。を。仕。て。す。常。た。く。い。ろ。く。ま。の。常。に。云。や。う。は。又。と。常。に。爐。に。あ。り。し。て。並
常。解。ち。う。け。は。し。て。一。生。を。今。と。せ。た。と。願。ふ。心。に。い。ろ。く。も。知。て。夫。も。樂。を。さ。せ。た。と。あ。り
又。妻。を。ち。づ。く。抱。き。と。妻。の。手。柄。と。し。て。嫉。妬。の。心。を。く。妻。を。已。ま。ず。く。常。に。怠。慢。なり。故。に。終
り。ふ。家。畜。と。なる。者。多。し。と。い。ふ。此。後。務。真。順。誠。を。貴。嘆。に。堪。た。り。

A woodblock print illustration from a Japanese book. It depicts two men in traditional robes sitting on a tatami floor. One man, with a beard and a blue sash, is gesturing with his hands while speaking to the other man. To their right, a small brazier with a pot on it is lit, and a vertical pole with a red and white striped cloth hangs in the background.

飲酒の禮ハ殊ニ嚴重アリ先文席を及客相對して西人の中央ヨ行器（酒を盛て）盃盤（杯と盤）
 盃盤を盃の上ヨ置て客教人ヨ随ハ酒器の備圖の如ク先主人盃盤を取上酒を酌
 せ客ハ一揖次ニ客ヨ掌をさし合ハ教軍の聲ヨ主客俱ヨ発す次ハ客箸を客ヨ授けて次
 ハ杯盤を授て立人の左の手の甲をさし一揖一酒杯盤を更取彼飲者にて酒盃の上
 をゆさし左右ハ飲箸の先ヨ酒をすくハ大神水神聖人ニさし供ハ終て一揖ハさし
 主人教軍の聲ヨ發して掌を摺合て次ハ客飲箸にて鼻の下ハ餘ヨ揚酒盃ヨ飲半
 吞て一揖更れモ主如前の礼ヨ以飲終れハ又盛杯ヲ取て前の如ク盃止リぬ夫ヨ客
 酒を盛て主人に授て礼ヨ取ハて酒ハ杯ヲ取て汲入と礼ヨ取ハて桃子を用ヤる事ヲセハ



シ「カリ」曰「リ」セ「亦曰」ウ「ハ」
 舞躍の事ヲ「遠近」知々「ハ」テ
 又「流」俗大「同」ヲ「異」ナリ「又」状
 鳥の「翾」を「多」形と
 写「た」る「舞」と「ス」ウ
 酒宴の時客に「盃」を
 進め則座に「立」舞
 事と「多」を「振」
 舞の古意爰に
 残れり「ナリ」



ウカリ稽古図

ウカリといふ事、を夷人暇ある時ハ
稽古す、大り三尺余の櫃を人毎に取持
一家の内に然るなり 集王脊に
皮薦の美を負ひ打合て手練するニ
此地未文字なり、喧嘩口論の後負
たる方まで諍證文を書替り、所持
より宝物をせしめて中並するを償と云
又提賊女犯の罪も亦同一、又事の輕重
にして宝数種を取て許容す、備定を少
す、てウカリと云ふは、双方親族
集り、先罪を犯たる者を捉きて三度打
次は相手の者も打互に打れて安全あれ
ハ償に及まん、其後弱き由て只一打み



て斬死する者なり、又半死の
病者と成るものなり、浮身痺
逆の者ハ事を打てて安全
なり、故にこれを稽古急慢
なく勤るなり



ウカリするは双方親族
集て如式三度打事へ帰
女、笛の音に水を掛け打
る者も振うけくへウタキ
時ノちけて補助に



「ヨエニ」曰「ケウエムシウ」是ハ酋長
 等遠境西に至リ海陸共ニ隔リ
 たる時行を事ニ先冲ニ舟見カ
 れモ又処の者モ老若男女番の如
 く太刀棒陸の類拔連ニシカモ
 ハハキキとて時の声の如クホイ
 と哀ニ幽ニ呼ル云男夷ハ忽
 声ニ罵王諸をテウと云々
 手もつけ小歩行一舟の来る方
 勢盛に進ける舟より之を見て
 太刀棒拔連一忽声ニけ
 舟を進め又舟と二三番相廻せ
 陸の者もくまうと廻りて二
 町引退て又間に舟を満ル



是等皆太刀棒等、進めり向うも敵も来り
 合て取才棒等打合を時の声を揚て左右へ向と
 別る此中ハ後僕とも席と殺け迄
 各座に就て禮如式なり一の
 安金を語きり



此蝦夷奇觀といふい最上徳内とて蝦夷諸島を開くゝ為飯海し遠く加
護西葛杜加追までも航海せりとあり往年予江戸に居て此小関三栄乃所
をも邂逅せり其人己八十余歳多き今も考ふ必此人の書残る者彼地
存せりやと思ふ今茲安政五年戊午大槻元弟クナニリ 警衛の外科に補せられ
八月中旬より戻國の時クナニリに書写したる者を騰写せり此他冊子平
く三國通覽の如きも累蝦夷の土産瓜土を記載し里参考す

梅嶺處士菅野明良識

安政五戊午九月十五日寫了

